

NHK スペシャル取材班著「グーグル革命の衝撃」新潮文庫 新潮社 2009年9月1日刊を読む

グーグル革命の衝撃 - グーグルは『知』ではない -

1. 2007年4月12日。東京大学の入学式の式辞で小宮山宏総長は、インターネットを通じて誰もが簡単に情報を手に入れられる時代の危うさについて、警鐘を鳴らした。
2. 「皆さんには、『常識を疑う確かな力』を養ってほしい。学問的な疑いの直感は、その人の頭の中で多様な知が関連付けられ、構造化されて初めて働くものだ。知を構造化することと、大量の情報をもつことは、全く異なる」
3. 「最近、インターネットを駆使して誰でも大量の情報を短時間のうちに入手できるようになった。このような情報環境の中で育った皆さんは、学術情報は簡単に手に入るのが当然だと思っているだろう。しかし、ひと昔前は全く違っていた。私が若い教授だったころ、学術情報を入手するためには、多くの論文に目を通したり、人に話を聞いたり、カードを作って整理したりと、大変な手間が必要だった。もちろん現在の方が便利に決まっている。しかし、その便利さにこそ落とし穴がある。情報収集にかけた膨大な手間と時間は、無駄なように見えて、決して無駄ではなかった。その作業を通じて、頭の中で多様な情報が関連付けられ、構造化され、それが『閃き』を生み出す基盤となっていたからだ。インターネットで入手した、構造化されていない大量の情報は、『思いつき』を生み出すかもしれないが、『閃き』を生み出すことは極めて稀だ。頭の中に、いかに優れた知の構造を作ることができるか、それが『常識を疑う確かな力』を獲得する鍵なのだ」
4. 知識が爆発的に増えた現代、人類はかえって知を有効に使えないジレンマに陥っているのではないか。こうした問題意識が根底にある。
5. 小宮山総長は、式辞の中の「インターネット」という言葉をそのまま「グーグル」に言い換えてもよいとした上で、グーグルをはじめとする検索サービスは、情報を整理する手段でしかなく、構造化された「知」とは異なるものだとする。
6. 「知の領域は、ざっと百万はあるが、今は知の分野が極端に細分化され、相互の関連性が失われている。その中で、ほしい情報を即座に出してくれるのがグーグル。グーグルのおかげで、どこにあったか分からない断片的な情報も分かるようになった。確かにそれは革命的だ。しかしそれが知だと思うと危ない。これは、人の頭の中に相互に知が関係し合っただけで全体像を作るという構

造とは全く違う」

7 . グーグル革命がもたらす光と影。どちらの面についても、かつてないスケールで人類に影響を与えることになるだろうと、小宮山総長は話す。

8 . 「20 世紀初頭、人類はアンモニアの合成に成功し、それはノーベル賞をもたらした。光の面は、肥料が合成できるようになり、一気に農業生産が拡大したこと。一方で、爆薬をチリ硝石に頼らなくても済むようになり、その結果ドイツは第 1 次世界大戦を起こす決心を固めた。あらゆる技術には光と影がある。グーグルは、その落差がかつてないほど大きいのかもしれない。そこに僕らは不安を感じる。なぜなら、人間の脳、人間の知に直接関係するからだ。爆薬が作れるぐらいの話とはわけが違う。」

P301 ~ 304

[コメント]

すべての科学技術のかかえる根本的な問題を小宮山東京大学総長はグーグルによるインターネット革命にも提起しようとしている。真剣に真正面から考えるべきだ。

- 2010 年 11 月 9 日 林 明夫記 -